

第二章「銀河鉄道の夜」研究・2

《ジョバンニ》の行方

日蓮主義による世界統一の夢

「銀河鉄道の夜」をどのような視点で読むか。たとえばジョバンニとカムパネルラとの友情物語、また父親のいないジョバンニの成長物語、さらには宇宙を旅するSF物語といった読み方も可能だろう。今回私は宗教物語という視点から、特にキリスト教と仏教の対立という構図の中で主人公ジョバンニに託された問題を考察してみたいと思う。

一 ジョバンニはどのような大人になるか

私の提起は、物語が閉じられた後《ジョバンニはどのような大人になるか》という問いの設定から始まる。その前提として、ジョバンニが大人になる時代を、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と続く、いわゆる一五年戦争時代と仮定しておきたい。むろん、賢治が「銀河鉄道の夜」の作品の舞台を日本ではなく西欧・イタリアにした理由も考慮しなければならぬが、やはりその前段階として、歴史的文脈の中で賢治のテキストを追究しておく必要があると考える。

《ジョバンニはどのような大人になるか》という問いは、たとえば《賢治が長生きしたらどうなったであろう》という問いと重なるものである。しかし、後者のこのよく口にされる問いは、これまであまり建設的な議論を導くことがなかった。おそらくそれは、作者の思想を知る手がかりは結局のところ作品それ自体を超えるものはないという自明の論理が、複雑極まりない賢治のテキストに跳ね返されてしまうという事情による。書簡がそれなりの数残されているとはいえ、書簡によって賢治の思想の全体を組み立てられると考えるのは幻想にすぎない。

押野武志の『宮沢賢治の美学』（翰林書房、平12）に、私と重なる問題意識を見出すことができる。押野は「鳥の北斗七星」や「大礼服の例外的効果」を例に挙げ、そこに《美学化》というシステムの働いている危険性を指摘する。《美学化》とは、本来対立するものをイメージや感傷といった叙情・情緒によって読者を納得したような気分にさせてしまう機能性といった意味である。このことは、賢治テキストに内包される《美学化》のシステムが、歴史的文脈のなかでは必然的にナショナリズムやファシズムといった問題性を帯びることを意味する。

私は、この押野の指摘を今後の賢治研究にとって重要な問題提起と捉えている。ただ、賢治テキストにおける《美学化》やナショナリズム、ファシズムの問題をさらに押し詰めて検証するためには、賢治が晩年まで推敲を重ねた「銀河鉄道の夜」での検証作業が必要不可欠なのではないかとも考えるのである。ジョバンニが長じてイタリアンファシストになるかジャパニーズファシストになるかは別レベルの問題として、《美学化》の果てにあるものは、昭和一〇年代と限定して考えれば、やはりファシズムの容認ということになら

ざるを得ないのではないか。さらに、そこに宗教的使命感が絡めばファシストになる可能性の高いことは、過去の歴史が示していることでもある。

二 宗教的対立（キリスト教と仏教）の美学化

「銀河鉄道の夜」には、「ほんたうの神さま」をめぐる宗教的対立の構図が組み込まれている。

（ジヨバンニ） 「僕たちと」諸に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。」

（かほる） 「だけどあたしたちもうこゝで降りないといけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」

（ジヨバンニ） 「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさへないけないうって僕の先生が云つたよ。」

（かほる） 「だつておつ母さんも行つてらつしやるしそれに神さまが仰つしやるんだわ。」

（ジヨバンニ） 「そんな神さまうその神さまだい。」

（かほる） 「あなたの神さまうその神さまよ。」

（ジヨバンニ） 「さうぢやないよ。」

（青年） 「あなたの神さまってどんな神さまですか。」

（ジヨバンニ） 「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんではなしにほんたうのたつた一人の神さまです。」

（青年） 「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人です。」

（ジヨバンニ） 「あゝ、そんなんではなしにたつたひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」

ここに明らかなのは、かほるや青年が信じる「神さま」に対し、ジヨバンニが「ほんたうの神さま」は他にいるはずと主張する、宗教的な対立である。テキスト上、かほるや青年の信じる「神さま」はキリストらしき人であることが理解される。では、作者はこの宗教的対立にどのような結末を用意したのか。誤解を恐れずにいえば、そこにあるのはあたかも対立が止揚・消滅されたかのような、《美学化》された結末に他ならない。

（ジヨバンニ） 「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」

（ジヨバンニ） 「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。」

この独白には、伏線として、「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のかんだなんか百ぺん灼いてもかまはない」という「蝸の火」の場面におけるジヨバンニの決意が効果的に働いており、それゆえ読者は非常な感動をもって読み終える

自己を発見することにもなるのである。

しかし、ジョバンニが「みんなの」という時、そこにキリスト者（かほるや青年）は含まれているのだろうか。含まれていないとするならジョバンニは「みんな」という語の使用法を意図的にずらしたことになる。また、含まれているとするならば、それは語法としては正しくとも、キリスト者の意志を無視した一方的な押しつけということにならざるを得ない。つまり、ここにも押野の指摘する《美学化》という罫が潜んでいるのである。本来対立しているはずのキリスト者の「神さま」とジョバンニの「神さま」の問題が、終末部においてはあたかも対立が止揚されたかのような、《美学化》された読みが可能になっているのである。

実は、ジョバンニの言う「ほんたうの神さま」や「みんなの幸」の問題は、テキスト上「ぼくほんたうはよく知りません」、「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう」と棚上げにされることによって、ジョバンニ内部のファシズムは封印されたまま先送りされる仕組みになっており、ジョバンニの決意がそのまま「銀河鉄道の夜」の作品としての矛盾や危険性を意味するわけではない。しかしわれわれは一度立ち止まって考えなおして見る必要がある。賢治の思想は少年小説という枠の中だからこそ結果的に成立し得たまでだったのではないかと。なぜなら、物語としては無矛盾的に閉じられていたとしても、少年ジョバンニは、われわれと同様いつか大人になる運命をもつからである。

三 ジョバンニが長じてファシストになる可能性

（一）作品の底に秘められた賢治の思想

《ジョバンニが長じてファシストになる可能性》を論証してみる。初めて読むという段階では、「銀河鉄道の夜」はキリスト教的世界を描いた作品という印象を強く受けることかと思う。だが、繰り返し読んでみるなら、「神さま」の問題に関し、ジョバンニはキリストと異なる別の神というものを考えているかもしれない、また、作者はジョバンニに将来別の神を見出させようとしているのかもしれない、ということが見えてくる。すると、それまで特に深い意味も考えずに読み過ぎてきた、「ジョバンニの切符」や「蝸の火」といった存在が気にかかってくる。

たとえば「ジョバンニの切符」。これは特権的なものでどこへでも行くことができると思われるものである。それに対し、カムパネルラは普通の切符しか持っていないことが読者に明かされる。となれば「ジョバンニの切符」の特権性とは、作者賢治の信仰を考慮に入れば、日蓮の十界曼荼羅が自ずと想起されることになる。また、「ほんたうの神さま」に関する対立の場面で、ジョバンニはかほるに「ぼくたちこゝで天上よりもっといゝところ」を作らなければならないと言いつ返しているが、ここにもまた法華経の「娑婆即寂光土」の思想が見出される。したがって、「ほんたうの神さま」もまた、その根本イメージとして法華経にいう「久遠実成の釈迦仏」を想定したものと見るのが可能になる。

「蝸の火」の問題は、「ジョバンニの切符」、「ほんたうの神さま」ほど解釈が確定していない。だが、一見ギリシヤ神話を元になっているかのような「蝸の火」も、やはり仏教との関連で解釈できるのではないかと私は考えている。佐藤泰正（『『銀河鉄道の夜』―その未完のモチーフをめぐる―』「宮沢賢治」創刊号、昭56）は、「桔梗いろのつめたさ

うな天をも焦が」す「黒いけむり」という描写に注目し、それを「キリスト教への異和と異議のモチーフ」と解釈している。つまり、「蝸の火」には非キリスト教的な問題が入り込んでいると見なすことが出来るのである。一方、工藤哲夫は「『蝸の火』考」（『賢治論考』和泉書院、平7）で、日蓮の「身延山御書」に見える《獅子追われ井戸に落ちた狐の話》が「蝸の火」の典拠ではないかと指摘しており、私自身妥当な推定と判断している。そうすると、賢治は、キリスト教的世界観を示す「銀河鉄道の夜」の底に仏教的な世界観を潜め、そのほうがより高いものであるという世界観に立つてこの作品を書いた、と判断せざるを得ないことになるだろう。

（二）田中智学のファシズム（日蓮主義による世界の統一）

宮沢賢治は、日蓮主義団体国柱会の設立者田中智学の影響を強く受けている。賢治がいかに田中智学に心酔していたかは、大正七年から九年くらいまでの書簡を見れば確認できることである。すでに先行研究において繰り返し指摘されてきたものではあるが、論の展開の都合上以下に引用する。

今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対服従致します。ご命令さへあれば私はシベリアの凍原にも支那の内地にも参ります。乃至東京で国柱会館の下足番をも致します。それで一生をも終ります。

（保阪嘉内宛書簡、No.177 大9）

別冊「世界統一の天業」何卒充分の御用意以て御覧を願ひます。――略――
「日蓮聖人の教義」「妙宗式目講義録」等は必ずあなたを感泣させるに相違ありません

（保阪嘉内宛書簡、No.178 大9）

もつとも、晩年における賢治の思想にどの程度田中智学の影響が残っていたか。この点に関しては、それを推定する資料が少なく、智学から離れたともそうでなかったとも解釈されているのが現状である。ただ、第一回宮沢賢治国際研究大会のために来日した黄瀛氏の証言を新たな資料の一つに加えるなら、賢治の田中智学への傾倒は、若い時の一時的なものとするよりは、ある程度晩年まで田中智学と精神的に近いところにいたと判断すべきかと考える。

賢治と会ったのは二九年五月、陸軍士官学校の北海道への卒業旅行の帰途、一行が花巻に立ち寄った時。――略――続いて宗教が話題になり、賢治は自分が信仰していた日蓮宗の宗教団体「国柱会」の指導者、田中智学について「宗教についてとてもよくわきまえている学者的な宗教家だ」と語ったという。

（インタヴュー記事、「岩手日日」平8・8）

とすれば、「銀河鉄道の夜」における宗教的対立を考察するためにも、田中智学の法華経思想というものを確認しておくことが必要となるはずだ。

智学の法華経思想は国家意識と強く結びついたもので、天皇主義に基づく国体思想の強調された点に特徴がある。智学による法華経流布の戦術は、まず一〇期五〇年計画で国柱

会会員とその組織の圧倒的拡大をはかり、仏教における転輪聖王としての天皇を中心とした法華経一元国家を実現する。ついで、法華経による侵略的世界統一の実現という最終目的を目指し、従わない場合日本軍隊をもって世界を統一する。こうして、この世界に「寂光土」（世界平和）を実現させるというものである

このように田中智学の法華経思想は、明治日本の帝国主義的世界侵略とびつたり重なるように展開されていくのだが、智学の圧倒的影響下にあった賢治の法華経思想を追究する場合、智学の法華経思想とどこが同じでどこが異なるのかということを、慎重に見極めていく作業が重要となる。「銀河鉄道の夜」における宗教的対立の考察も、それを知る手がかりの一つと見ることができる。

（三）賢治における田中智学の影響

賢治の法華経理解が田中智学の影響下にあることを初めて論じたのは、上田哲（『宮沢賢治―その理想世界への道程―』明治書院、昭60）だが、近年では関井光男（『「共同討議」宮沢賢治をめぐる』、「批評空間」Ⅱ・14、平9）の発言もある（第三部第四章参照）。ここではなるべくそれらと重ならない範囲で、賢治における智学の影響を見ておくことにする。

「銀河鉄道の夜」におけるジョバンニの「きつとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く」という決意は確かに感動的な台詞ではあるが、実は「ほんたうのさいはい」を探そうとしたのはジョバンニだけではなく、田中智学もまたその一人であった。保阪嘉内宛書簡にその書名が記された『世界統一の天業』（天業民報社、明37）において、冒頭智学は次のような決意を述べている。

予は日本人である、然れども偶々此の論述を成すに当たりて、みづからの日本人であるのを遺憾とするのである、故に是より暫し日本人たるの資格を離れ、世界人類の一員として、世界人類の最終希望を代表して、人類究極の幸福の為に、一つの大福音を宣伝しようとおもふ。

言葉の上だけからいえば、智学のいう「人類究極の幸福」とジョバンニのいう「ほんたうのさいはい」に、われわれはどのような差異も見出せないのではないか。しかも、智学の「みづからの日本人であるのを遺憾とする」といった姿勢や、「大福音」というキリスト教用語の使用は、いかに欺瞞的なものであったにしろ、「銀河鉄道の夜」の主人公がジョバンニという西欧の少年と設定されたことと何らか通い合うことも確かである。

また、「農民芸術概論綱要」には「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という言葉がある。これは通常、法界成仏という天台教学の根本思想を賢治なりに表現したものと考えられているが、より正確に推定すれば、田中智学の影響の痕跡と認められるものである。保阪嘉内宛書簡に「必ずあなたを感泣させるに相違ありません」とある『日蓮聖人之教義』（国柱会産業株式会社書籍部、明43）には、次の言葉が見出せるのである。

『国家』が安穩でなければ『個人』が安穩でないように、やはり『世界』が間違つて

居る限りは『国家』も常にその波及を受けて、根底より不安を排除することは出来ない。

さらに、ジョバンニの「ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとをこさへなければいけないうて僕の先生が云ったよ」という台詞が、法華経の「娑婆即寂光土」の思想に合致することを先に指摘したが、この台詞も『日蓮聖人之教義』の次の言葉と重なるものである。

人は極楽や天国のような、非現実なる空想をさへ理想境として、現実の人生を犠牲にするほど、理想に忠実なものではないか、それが何故この『現実の世界に於ける理想的実現』に意を寄せないのであらう、吾人は極楽や天国のような無責任な理想境は、一顧の価値もないものとおもふ、『敲けば音のする現実の境界に、極楽以上天国以上の大理想境が建設せらるゝといふ教』に対しては、身命もなにも一切入揚げて忠実を捧げる心得である。

智学をして「身命もなにも一切入揚げて忠実を捧げる心得」にせしめた『敲けば音のする現実の境界に、極楽以上天国以上の大理想境が建設せらるゝといふ教』とは、おそらく法華経または日蓮の教えを意味する。ジョバンニの言う「先生」とは誰をさすのか。作品において先生とは担任の先生を指すことになるが、その背後に日蓮そして智学の影のあることは確かなことだろう。

(四) 田中智学のキリスト教観

智学が「極楽や天国のような無責任な理想境」という時、対立宗教として浄土真宗とキリスト教が意識されている。智学の初期の代表的著作である『宗門の維新』（師子王文庫、明34）を見てみると、そこには、法華経による国内の宗教統一の戦略が示されており、宗教的対立に関する智学の考え方のおおよそを掴むことができる。

我邦最終の教陣は、本宗の外『真宗』と『耶蘇教』とのみなるべし、此三大宗教は実に四海の壯觀を集めて、天下分目の法戦を瑞穂の野に交ふべし、然も天運既に帰し地利人和併せ得たる本化妙宗の膨張力は、山岳河海をも翻転しつべく、殊に況や宗旨教義の正邪優劣、天淵もたゞならざる分明の勝算は、とく既に内外有識者及挙国の同情に認定せられ、「第十期」の中間に及ばずして、『真宗』と『耶蘇教』は我邦に跡を絶つに至らんこと必せり、斯の如くにして宗教の天下終に一に定まり、挙国既に一乗の民と成り、帝国議會の大多數、本化妙宗の経国主義を奉じ、畏れ多くも皇室亦疾くに斯正教と冥合し玉ふに至り——略——

智学は、法華経による国内統一のための最終的な対立宗教を浄土真宗とキリスト教に見、しかも、「第十期」（四五年〜五〇年後）の頃までには、「宗旨教義の正邪優劣」により、「我邦に跡を絶つに至らんこと必せり」と主張しているのである。

(五) 田中智学と満州侵略

智学は八〇年（昭和一四年没）の齢を保った人物であるから、『宗門の維新』を書いた四二歳（明治三四年）から数えて三八年を生きたわけで、当然その間、自身の計画通りに事の運ばなかった事実をその目で確認していることになる。ただ、法華経信者が予定されたように増えなかったからといって、智学の「侵略」的折伏が社会的影響を持たなかったわけではない。『宗門の維新』を読み熱烈な法華主義者となった高山樗牛はもとより、「満州」侵略に主導的働きをした関東軍参謀の石原莞爾も熱心な国柱会会員であった。

嗚呼、小は一身のことから大は国家の事迄すべての帰結は、南無妙法蓮華経の七字ではありませぬか。一身の成仏勿論大問題です。然し吾々の南無妙法蓮華経は何処迄も日蓮聖人の御示しになった通り、国家、神性なる我皇国の成仏でなければならぬと思ひます。

これは、大正九年六月、石原が赴任地である中国の漢口から、銚夫人に宛てた書簡の一節だが、ここに見られる「南無妙法蓮華経」による法界成仏の思想は、賢治と同じものである。賢治の国柱会入会は大正九年の十一月頃、石原の入会は日記の記述から推定して大正九年の一月頃と考えられ、偶然にせよその時期の重なりは注目に値する。むろん二人ともそれ以前からの熱心な法華経信者であった。

石原は「世界最終戦論」を唱えたことで知られるが、それは、軍事・政治・産業・科学・宗教各方面からの分析結果として、近未来における世界最終戦の勃発を予告したものである。石原はドイツ留学時代（大正一二年〜一四年）に「世界最終戦論」の構想を得たとされている。だが、その発想の根本にあるのは田中智学の日蓮主義による「世界統一」への夢であった。今手元の『世界最終戦論』（新正堂、昭17）で確認すれば、「仏教の予言」に一章が割り振られており、日蓮や田中智学の名を幾度となく見出すことができる。

日蓮聖人以後の第一人者である田中智学先生の師子王全集の中に、大正七年の或る講演で「一天四海皆帰妙法は四十八年間に成就し得ると言ふ算盤を弾いて居る」（師子王教義篇第一輯三六七頁）と書かれてをります。大正八年から四十八年位で世界が統一されると言つて居ります。どう言ふ算盤を弾かれたか書いてありませぬが、田中先生は天台大師が日蓮聖人の教を準備された如く、時来つて日蓮聖人の教義を全面的に發表した——即ち日蓮聖人の教えを完成した予定された人でありますから、この一語は非常な力を持つて居ると信ずるものであります。

田中智学の法華経による世界統一の戦略はすでに記したが、石原は「折伏を現する場合の闘争は世界の全面的戦争であるべき」（同章）というかたちで、智学の夢想を実現すべく「世界最終戦論」を打ち立てていったと見ることができる。昭和一〇年六月、田中智学は「満州」へ旅立ち、各地で「国体の正義」を講演し、さらに「満洲皇帝」に「王道の本義」を講じている（田中芳谷著『田中智学先生略伝』昭49、師子王文庫刊による）。ちなみに、石原が東条英機の軍政を厳しく批判したことにより現役を追われ予備役編入となったのは、昭和一六年三月のことである。

おそらく、法華経・日蓮・田中智学への絶対的服従という意味において、宮沢賢治と石

原莞爾との間にその差異を見出すことは難しいことである。石原は軍事的な方面において智学の思想を発展させ、賢治は文芸的な方面において智学の思想を発展させたと言えることができるかもしれないが、賢治テキストに軍事的な色合いを読み取ることができる以上、もう少し詳しく作品に沿って考察を推し進めておかなければならないだろう。

(六) 烏の義勇艦隊

もしジョバンニが長じて、「ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとをこさへなけあいけない」と教えてくれた「先生」が田中智学であり、「みんなのほんたうのさいはい」が、妙法蓮華經による世界統一で果たされると知ったなら、どうであつたろう。私たちはジョバンニがファシストとまらない保証を「銀河鉄道の夜」のテキストから探し出せるのだろうか。

その意味で、「烏の北斗七星」という作品は、「銀河鉄道の夜」における宗教的対立のその後を想定してみようとする時、とても示唆的な内容を含んでいる。

「烏の北斗七星」はなぜ「義勇艦隊」なのか。義勇軍であることは徴兵された正規軍と異なることを意味する。しかし、日本での義勇兵は一般的ではない。第二次大戦末期に「義勇兵役法」が制定された事実はあるが、むろん「烏の北斗七星」で「義勇艦隊」が組織された背景の説明にはならない。私は一つの可能性として、田中智学の構想した「宗設義勇艦隊」のイメージが背景にあつたのではないかと考えている。

「宗設義勇艦隊」は武装し得べき商艦にして、毎年大小を通じ約十隻已上を建造し、資力の増大を待て漸次巨艦を造る、常に内外の航海に供して、宗用及国用の利便に備へ、国家一朝有事の日は、全艦隊を挙げ、無料使用の条件を以て、朝家の用に捧ぐ、その平時の用途は左の如し ―略―

(『宗門の維新』)

智学の一〇期五〇年の計画によると、一年毎に一〇隻を建造し五〇年目には二九一五隻の「義勇艦隊」を保有する予定になっている。通常は「貨物積載、乗客登載、その他一般の船業」に従い、「国家一朝有事」において軍艦として使用されるのである。それとともに「毎船必ず『布教師』及び『医術兼修の行衆』若干員を置き、船中に於て毎日修行及演説を以て法益を布き、又図書閲覧室には、經典、祖判、布教用の新聞雑誌を備ふ、その他内地巡教の各隊、海外留学、海外伝道、海外宗教殖民の宗用登載に供す」とも、「義勇艦隊」の仕事の規定しており、宗教、軍事両用に使用目的のあることが分かる。

烏の「義勇艦隊」が軍事的目的を持つことは作品に明らかだが、もし背景に智学の「義勇艦隊」のイメージがあるとするとするなら、烏の「義勇艦隊」には、作者賢治の宗教観も託されていると見るのが可能になる。ならば、烏の「義勇艦隊」は法華經信者を寓意し、殺される側の山烏は、對抗宗教としてのキリスト教、または浄土真宗の信者を寓意したものとなる。押野武志(前出)が指摘しているように、この作品には「敵の山烏の死を悼み、死骸を厚く葬ることで、勝者の良心の疼きを示しつつ、情緒的に免罪される」機能が働いている。したがって、「烏の北斗七星」という作品は、宗教的世界統一の過程で生じる犠牲者に対する賢治流の「免罪」法としても解釈できるのである。

とすれば、智学の命令であれば、「シベリアの凍原にも支那の内地にも参ります」と友

人に書き送った賢治であるのだから、大人となったジョバンニは、もしかすると「鳥の北斗七星」の義勇艦隊の大尉のような人物になるのかもしれない、との推定もそれなりの根拠をもつことになる。

ジョバンニは田中智学の「宗設義勇艦隊」に入隊し、海外布教に出かけ、キリスト者を法華経に改宗させようとする。しかし、武力で抵抗されたためそのキリスト者を殺してしまふ。その結果、ジョバンニは義勇艦隊内で昇進するにもかかわらず、（ああ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたくしのからだなどは何べん引き裂かれてもかまいません）と祈るのである。「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない」と祈ることもできるだろう。祈りを終えたジョバンニは、鳥の少佐（大尉から昇進）が許嫁の元に帰ったように、母親の待つ日本（作品としてはイタリア）に帰るのである。

なお、鳥の大尉が祈りをささげる「マヂエル様」のことであるが、大熊座の学名「ウルサ・マジョール」からの造語と推定されており、大熊座の一部である北斗七星が「マヂエル様」の意味対象であるとみて差し支えがない。タイトルとも重なるこの北斗七星は、仏教（密教）においては北斗の本地とされる妙見菩薩として信仰を集めており、賢治がここで北斗の本地とされる妙見菩薩をイメージさせようとしていたのか否かは別としても、何らか「信仰的絶対者」の存在を前提としていることは確かである。したがって、殺された山鳥側にとつての「マヂエル様」の位置付けが明らかでない以上、鳥の「義勇艦隊」と山鳥との対立は、軍事的にであれ宗教的にであれ、「マヂエル様」への祈りによって解決されることは決していないのである。これは或る意味、「法華経」ならぬ「マヂエル様」による世界統一に他ならない。

四 再び、ジョバンニはどのような大人になるか

これまで、賢治テキストに見出される田中智学の影響の幾つかを指摘してきたが、それとは逆に智学の影響といった視点からだけでは解釈し切れない問題が、賢治のテキストには数多く隠されていることもここで指摘しておかなければならない。

私は先に、賢治の「農民芸術概論綱要」にいう「菩薩行」と、智学の『世界統一の天業』にいう「大福音」との共通性を指摘した。その指摘は指摘として意義あるものと考えているが、そもそも、賢治のいう「菩薩行」とは何かが私にとって明らかでない。特に日蓮・智学が声高に唱えた「折伏」との関連が見えてこない。「虔十公園林」を例に考えてみよう。主人公の虔十の生き方を賢治にとつての「菩薩道」の一つの形象化と見た場合、そこに「折伏」の要素がどこにも見出せないのはなぜか。

「銀河鉄道の夜」における法華経とキリスト教との対立に関しても、類似の問題が隠されている。智学の日蓮主義による世界統一の夢は、国家権力を前提にしはじめて成立するものであるのに対し、「銀河鉄道の夜」のテキストは、智学の強調する『国家の力』からも『信仰の強制』からも遠く隔たっている。

『信じるものは信じなさい、イヤなものは止しなさい』といふのではなく、『何が何

でも正法を信ぜよ、信ぜざるものは罪惡なるぞ』と宣言して、強て之を持たしめんとするのだとある、果たしてそうするには、勢ひ之を制裁する「力」が要る、それは『国家の力』でなければならぬ、法律的命令でなければならぬ、

（『日蓮聖人之教義』）

智学とジョバンニとの違いはどこにあるか。「人類究極の幸福」、「ほんたうのさいはい」とその目指すところは同じであるにしろ、実は、答えを知っているかいけないかという点に決定的な違いがある。智学は答えを知っており、ジョバンニは答えを知らないのである。智学の場合、その答えはいうまでもなく「法華經」による「世界統一」である。

では賢治はどうか。「農民芸術概論綱要」は大正一五年六月頃に書かれたと推定されるものだが、そこには「われらは世界のまことの幸福を索ねよう」とだけ記されている。「世界のまことの幸福」が何かまでは記していない。ただ、伊藤清一ノート（伊藤氏は大正一五年一月に開設された岩手国民高等学校の受講者で、賢治から「農民芸術」の講義を受けた。）によれば、賢治はその答えを知っていたようである。「我等は世界のまことの幸福をもとめや／道を求める其の事に我等は既に正しい道を見出した、／仏教で云ふ菩薩行より外に仕方があるまい／しからば菩薩とは何に^{どこ}か？ 大心の衆生なり、――略――」と講義していたのである。

つまり、賢治個人としては「世界のまことの幸福」の答えを知っていたにもかかわらず、作者としての賢治は、主人公ジョバンニを決意表明の段階に止め置いたということになる。したがって、賢治にとつての「銀河鉄道の夜」とは、あくまで決意に至るまでの物語であり、「ほんたうのさいはい」の何であるかを明らかにするための物語ではなかった。それはなぜか。たとえば、そのような方法でなければ伝えられないものとして「ほんたうのさいはい」が存在しているためかもしれない。賢治のいう「菩薩行」とは、賢治自身の解説である「仏教で云ふ菩薩行」や「菩薩とは」「大心の衆生なり」の言辞からだけで理解し得るものでないように思う。

五 島地大等の宗教観

もしジョバンニが長じてファシストにならない道が残されているとするなら、ジョバンニが「たったひとりのほんたうの神さま」を持つ以上、大人になったジョバンニが異なる神を持つ他者に対して取れる態度は、一つしかないと考ええる。そしてそれは同時に、信仰を個人の枠内に止めおき、他者の信ずる神の存在を許容することである。それは、日蓮のいう「折伏」や田中智学のいう「侵略」から、一定の距離を保つことを意味する。

私はそのような可能性が全くないわけではないと考えている。たとえば、島地大等の影響である。

島地大等は、浄土真宗本願寺派の碩学で、賢治法華經帰依の直接的の契機となった『漢和对照妙法蓮華經』の編者でもある。盛岡願教寺の住職として毎年数ヶ月は盛岡に戻り、仏教講話会を行ったりしている。賢治は盛岡高等農林に在籍中たびたび島地大等のもとを訪れている。大等は一宗一派に偏ることのない幅広い見識の持ち主であった。

島地大等が実際どのような宗教思想の持ち主であったか。大正一〇年一〇月に雑誌「解

放」に発表した「明治宗教史（基督教及仏教）」から見てみる。島地は明治宗教史を著すにあたり、仏教とともにキリスト教にも同等の紙幅を与え、特にキリスト教における綱島梁川の「見神論」、小山鼎浦の「久遠の基督」、仏教における清澤満之の「精神主義」、高山樗牛の「日蓮主義」を、明治の「新信仰」として高く評価した。「この思潮は、啓発せられたる仏教基督教の新人は、共に等しく、それぞれの教主、釈尊及び基督に対して、人間性とヒューマニチー共に、神性とデビニチーを凝視した」と、島地はその理由を記している。

このような「新信仰」に対する島地の積極的な評価は、政治性を第一とする明治宗教への懷疑に裏打ちされたものと見ることができる。「明治宗教史は、その表面に於て、たしかに、政治的であつた。寧ろ、宗教家自体の政治心理も、多量に活躍した。自発的に、また誘発的に盛に、流動した」と記し、また、「国体と宗教との衝突を論じて、キリスト教を難ずるもの多く、固有の神儒仏三教の徒も、亦、これに和して、盛に耶蘇教退治を呼号し」たとも記している。

田中智学は、まさに「盛に耶蘇教退治を呼号」した人物の一人であつた。次に引用する箇所は、政治的宗教家田中智学への批判として読めるだろう。

明治二十三年の国会開設も、教育勅語も、仏教は、基督教と共に、無関心態に立ち得ないものであつた。得ないにしても、如何ともすることも出来なかつた。引續いて、朝鮮問題を経て、日清戦争となる。この間に於て、日本国民の中には、著しく愛国精神が燃へ、国民的自覚が深まつて来た。これと共に、基督教が、兎角に、愛国的色彩に乏しきのみか、動もすれば、この精神を破壊するものに非ざるかの疑を生ぜしむべき理由と事実の存せしため、これとの対抗上、仏教は常に所謂国家と親しみ国民を指導し、国家主義を以て立つべき役割となり、次第にその色彩濃厚鮮明となり、特に、二大戦役を経て、益々、その傾向を助長したゝめに、仏教は純粹なる国家主義者であり、帝国主義の信者であり、軍国主義の支持者である様に、自他共に考ふることゝなつた。此くして、仏教は絶えず政治的に開展し、その傾向を高め、遂に、所謂宗教としての第一生命の問題に驀進すべき自覚を、忘れて居つたかの觀があつた。その当時当面の問題に対する彼等の態度は、真面目のものであつたと云はれ得る。併し、凡てが一般俗衆の水平線を越ゆること能はず、宗教の第一義としての生命、即ち、人間としての自我の、赤裸々なる自覚内觀と云ふことにまで、進むで居らなかつたと云へる。この点では、当代の基督教に対して多少の差障はあつた。さしにも高まり来つた愛国的俗論の厭迫にも屈せず、露骨にその信仰を振りかざして、驀進しつゝあつた当時の基督者は、一種反動的傾向を有して居つたにしても、少なくとも、真実のものにより近い態度に立つて居つた。仏教者は、当然更に深く、覺醒しなければならなかつた。

大等のキリスト教に対する見方は「当時の基督者は、一種反動的傾向を有して居つたにしても、少なくとも、真実のものにより近い態度に立つて居つた」というものであつた。「銀河鉄道の夜」におけるキリスト者の扱ひは、大等のキリスト教觀に近いものであることがわかるだろう。大正一〇年一〇月に発刊されたこの大等の文章を賢治が目にしていたかどうかは分からないが、「銀河鉄道の夜」という作品が、智学的法華経觀から少しでもずれ

ているとするなら、大等の影響（または回帰）を想定することが可能なのではないだろうか。大等は日蓮主義そのものを批判しているわけではない。高山樗牛の日蓮主義を「新信仰」として評価していることから分かることである。その高山樗牛が日蓮主義に目覚めるきっかけとなったのが田中智学の『宗門の維新』という、すこぶる政治的な日蓮主義であつた点ことは単純でないが、賢治の日蓮主義もまた、田中智学に寄り添ったものでありながらも、その後追いに終始したものでなかつたことは認めてよいことのように思う。

＊

「銀河鉄道の夜」が文学として成り立っているのは、テクスト内部において、ジョバンニは決して大人にならない永遠の少年であつたからであつた。

「雨ニモマケズ」における「デクノボー」を、賢治晩年の思想の一端を表すと見るなら、「丈夫ナカラダ」を持った大人に成長したジョバンニのあるべき姿として「デクノボー」があるといえるかもしれない。「慾ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシヅカニワラツテキル」ジョバンニ。「ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレ」ないジョバンニ。しかし、このような想像とても、一五年戦争という時代状況下にある限り、「丈夫ナカラダ」を持っていることは即甲種合格を意味し、戦場に赴かなければならないのである。おそらく、賢治自身、大人になったジョバンニは描き得ないに違いない。そしてそれを「銀河鉄道の夜」という作品の限界、ひいては賢治童話の限界と見なすかどうかは、一人一人の読者が判断することである。

賢治は終生、田中智学の日蓮主義から離れることはなかつたと思われるが、賢治は別の意味で、大等の「仏教者は、当然更に深く、覚醒しなければならなかつた」という忠言に添った人生を歩んだと言えるのではないだろうか。そこには賢治自身の、例えばタツピング牧師やプジェ神父、斎藤宗次郎等キリスト者との出会いも影響しているはずだが、それは次章において扱う課題としておく。